

村瀬裕也著『人文科学の擁護』 4000字

島崎 隆

これはまた、美しく上品な表紙カバーである。バレエ「白鳥の湖」に登場するオデット姫の姿が著者自身によって描かれる。森を支配する悪魔ロットバルトとの闘いを決意したオデット姫の凛乎たる姿であるという。評者は少しはデザインに関心があるが、色柄とも見事な構成であり、和洋融合した造りのようにも思える。それは同時に、本書の内容にも関わっているといえよう。というのも、著者はもともと中国思想史が専門であるが、それとの関連で日本思想史にも明るく、同時にまたドイツなどの西洋哲学にも詳しいからである。こうした幅広い分野を横断する本書を、しかも四〇〇頁にもなろうとする大著を、この狭い紙幅で論ずることは、残念ながらまったく不可能である。そういうわけで、かいつまんで紹介せざるをえない。本書のタイトルは、昨今の文学部・教養学部や哲学などの削減・縮小という文科省の方向性に反対して断固として掲げられたものであり、全編そうした鋭い現代的問題意識に貫かれている。哲学を専門とする評者も、グローバリゼーションのなかで新自由主義に即応する、プラグマチックな教育内容への改変のなかで、人文社会科学が縮小されていく状況には、おおいに危惧している。

著者自身の思想史もそのなかにはいると思われる「人文科学」を断固として擁護しようとする態度は、まさに正当で揺るぎないものである。人文科学・社会科学・自然科学という必修の教養課程の三分野が「大学設置基準大綱化」によって崩壊してしまっただが、それに対抗して著者は、「科学的精神」（現象主義を批判して普遍化的認識を旨とする）と「ヒューマニズム」（人文主義と人道主義の統一を達成する）を原理的に掲げ、さらに反戦平和の思想から「人間の尊厳」を追求する。大いに賛同したい方針である。

さて本書は、四部から構成されている。第一部で人文科学とヒューマニズム（ヒューマニゼーション）の内容が検討され、第二部では理論的に現代唯物論の問題を、さらに三浦梅園、中江兆民らの日本近世・近代の唯物論思想が議論される。第三部ではリアルな現代的テーマとなっている、教師の主体性の確立の問題、教師の多忙化の問題が考察され、最後の第四部では、ゲオルク・ニコライ『戦争の生物学』に見られる愛国心の問題、安藤昌益の現実批判と平和思想の問題などが展開される。全体として平明であり、哲学にありがちな晦渋さはなく、その主張は明快である。ただ著者が中国や日本の思想史家であるせいか、原文からの引用が多く、その方面に無教養な評者などには、読みづらい面があった。

本書で扱われる範囲は実に幅広く、中国思想史からは、戴震（タイソ）、王夫子ら、日本

思想史からは三浦梅園、安藤昌益、中江兆民ら、西洋哲学からは、リッケルト、カッシーラー、フェニックス、フンボルト、ニコライ、ガルトウングら、日本の哲学研究者からは、戸坂潤、岩崎允胤、尾関周二、吉田傑俊らが扱われる。そして内容上、多くの興味深い論点に満ちている。とくにそのなかで、フェニックスという教育哲学者の「意味」または「価値」の構想は評者にも馴染みのないものであったので、印象に残った。

以下、いくつか論点を提示したい。

第一部に関して気になったこと。戸坂潤の学問論によれば、哲学の範疇組織を中軸として自然科学と社会科学とが共軛関係を結ぶとされる。この点で著者は、ここで「社会科学」が取り入れられた代わりに、「人文科学」が独自の位置を失っていると指摘する。たしかのその通りであろう。マルクス主義的唯物論では、人文科学はおのずと社会科学に編入されるのである。いずれにせよ著者によれば、全体的に学問は、人文科学・社会科学・自然科学と区分されることとなる。タイトルが「人文科学の擁護」である以上、その内容がはっきりされるべきだが、本書では、「人文科学」にはどういう学問内容がはいるかはっきりしていないようだ。さらにそもそも教育上、学問的分類の全体がどうなるか、気になる。この点を最後にまた問題にしたい。

また第一部末尾で印象に残ったことは、著者が西ドイツに滞在したさいに二人のヤパノロジーの研究者と対話したという、そのエッセーの内容である。彼ら西ドイツの研究者たちは、古典主義・人文主義に立つ、従来のフンボルト的精神がもはやここでは死に絶えた、と断言するが、それとともに、「反省されたヨーロッパ中心主義」がいま必要だとも補足される。こうした多文化主義的発想は、本書で印象に残った場面である。

第二部に含まれる、エンゲルスの「哲学の根本問題」やレーニンによる物質と意識の関係の問題は、いろいろと論争されてきた箇所といえよう。とくにここで触れたいのは、三浦梅園や中江兆民らの日本思想史の考察であり、評者としてはおおいに勉強となった箇所である。梅園を著者は、唯物論（気一元論）と弁証法の観点から高く評価する。彼の弁証法とは、「反観合一」（対立物の統一の認識）によって有名だが、その基礎に「一有二、二開一」という実在の弁証法があるという。またその人間論も注目されるべきであり、「反」の作用によって、相手からおのれを吟味する姿勢も重視されているとされる。ここに「相互承認」の論理も含まれ、人間が普遍性によって貫かれるとともに、そこに個性としての個別性も備わっている。こうして著者は、梅園の現代的魅力も十分に伝えているように思われる。さらに中江兆民が価値必然性によって自由を考えるということを強調したことも

注目されるが、割愛したい。

第三部は打って変わって教育的な論議になるが、これは著者が教育学部に所属していたことにも関わらるだろう。第三部は評者も若いころ高校教師だったこともあって、関心のある箇所だが、とくに教師の多忙化はいまや大きな弊害となっており、教育の大前提である「人間としての高度の教養状態」の達成が夏期休暇の短縮などによって貧弱になっているという指摘は納得が行くものである。また第三部の最後で、人間活動における「自由時間」の問題について諸説を紹介・検討している箇所は、理論的にも厚みがあり、興味深いものである。何をもってそもそも人間の「自由時間」となすかは、議論の余地のあるところである。結局著者は、全生活時間のなかの能動的な生活時間を想定して、そのなかの拘束労働時間を除いた時間帯を「自由時間」となす森岡孝二の分類に賛同する。

第四部は平和思想について議論するが、ここではまずニコライの著作との関連で、愛国心について詳しく論ずる。そこにおける愛国心の詳細な区分などは大いに参考となり、また愛国心の強調が政治的にも危険性をはらむという批判は理解できるものである。それでも、排外主義的でない、開かれた愛国心というのは可能ではないかと思われる。さらに民族性や文化的伝統との関わりから、愛国心は自然に生まれるものでもあろう。その点で、「我々の伝統を全人類から責任として引き受けている」という、著者の深遠な主張には、愛国心を正當に位置づけるさいのヒントがあるように感じた。第四部の最後は、安藤昌益についての充実した説明であり、彼についてある程度知っていた評者も、あらためて彼について、日本国憲法にも通ずる現代的重要性を学んだ思いがした。著者によれば、彼はエラスムスの平和思想を超えて、カント『永遠平和のために』と肩を並べる、平和思想の最高峰と評しても過言ではないという。そもそも昌益の思想には、平和主義、軍備撤廃、人間の平等、男女同権など、日本国憲法に直結するような思想が、封建の時代のさなかに、高々と掲げられていたのである。彼によれば、政治の状態を「治」（平和に見える状態）と「乱」（戦時的な状態）と区分した場合、前者はすでに、支配・服従の、搾取と収奪が日常化している状態であって、決して平和な「共生」の関係ではないとされる。だから「治」は「乱」の温床であり、そこにつねに「構造的暴力」（ガルトゥング）が存在している。彼は素朴ではあるが、社会における階級制（上下、貴賤、貧富）とそこにおける搾取を洞察していた。貨幣欲・致富欲が社会を動かすことを認識しつつ、彼は「農村共産制」を唱えた。さらに男女差別、環境問題にも彼は鋭い認識を示したが、この点は割愛したい。以上、本書の特長は、日本思想史の分析にあるように思えた。

さて以下、二つ疑問点を提起したい。ひとつは第一部で展開された学問論についてである。この点で、「人文科学」には哲学が帰属するのかどうかという問題である。また人文科学には、本書でも引用された、リッケルトのいう「精神科学」（神学、法学、文献学、歴史学など）がおおむね対応するといえるのだろうか。評者によれば、人文科学にさらに、文学、精神分析、芸術論などが帰属するように思われる。さらにまた、数学、システム論、情報論、形式論理学などの別系統の学問分野はどこに帰属するのかという問題も生ずるであろう。これらは自然にも社会にも適用できる学問である。これらは、「構造科学」「形式科学」などと名づけられる場合がある。もうひとつの疑問は、著者は現代的には、「実践的唯物論」の立場に立つとされるようだが、その内容はどのようなものか。さらにそれとの関わりで「異定立」という用語が使われるが、その意味をわかりやすくご教示していただきたいということである。いずれにせよ、危機に瀕する人文研究の重要性を訴える本書は、とくに現代で大いに読まれるべき積極性をもっているといえよう。